西南学院大学　国際文化論集　第二十四巻　第二号　二四九—二六七頁　二〇一〇年三月

八〇年代上海の表象

——中川道夫写真集『上海紀聞』より

新谷秀明

写真は、変化する都市の姿を定点観測として記録するのに最も有効なメディアと言えよう。たとえば私たちが日頃見慣れている大通りの交差点や百貨店の姿を、三〇年前や五〇年前の同じ場所を写した色褪せた写真の中に見出した時に、誰もがそこはかとない郷愁を感じる。上海という、この百年間に大きな変化を経てきた都市についても同じであり、二〇世紀初頭の外灘（ワイタン）を写した古い写真などに、私たちは興味を奪われる。

しかしここで紹介しようとする中川道夫『上海紀聞』[1]はそんなに古い写真ではなく、今から約二〇年前、一九八八年に出版された写真集である。著者の「あとがき」によれば、写真は一九八〇年から八七年にかけて撮影されたものとのこと。八〇年代初頭から終盤にかけての上海を活写した写真集、その特殊な時代性にこそ、この写真集の意味があると私は考えている。

八〇年代の上海とはどのような時代であったのか。一九七六年に「四人組」が逮捕され、十年間続いたプロレタ

リア文化大革命が終息。七八年の中国共産党第十一期三中全会で鄧小平が実権を掌握し、改革開放路線へと大きく舵が切られる。八〇年代初頭の中国はまさに「雪解けの時代」であり、それまで資本主義世界とは隔絶した状況の中で政治運動に明け暮れていた中国の人々が、外国の文化や思想を少しずつ受け入れ始め、自由の意味を知り始めていた時代であった。しかしこの頃はまだ外国人が自由に中国を旅行できる状況ではなかった。開放政策開始当初は訪中団の形で外国人を受け入れ始め、徐々に外国人留学生の受け入れ、一般の団体観光客の解禁と窓口が広げられていった。個人旅行者が自由に入国できるようになるのは八〇年代後半のことになる。

もっとも、香港の旅行エージェントの力を借りて入国するルートを使えば個人でも入国はできたので、欧米人バックパッカーたちは八〇年代のかなり早い時期から香港経由で入国し自由旅行を楽しんでいた。これには欧米バックパッカーのバイブル的ガイドブック『Lonely Planet』[2]が寄与するところが大きいが、その日本版とも言える『地球の歩き方』[3]中国編が八二年ころに出版されて香港経由入国の方法が日本にも紹介されてからは、日本人個人旅行者も増えていった。現在では旅行大手に成長したエイチ・アイ・エス（旧ＨＩＳ秀インターナショナル）が当時の日本のプロパー的存在であり、『地球の歩き方』と連動して、中国に向かう個人旅行者をサポートしていた。ただ中国国内に入っても自由に動き回れるわけではなく、当時まだ多数あった「未開放都市」に入るためには公安局で許可を取る必要があったり、外国人が宿泊できる宿泊施設が比較的大きなホテルに限られていたりと、外国人旅行者にはまだまだ行動の制限が多い時代ではあった。

要するに八〇年代は外国人に開放されてはいたものの限定的であり、現在のように中国の隅々の田舎町まで外国人の姿が見られるような状況とは大きく隔たっていたのである。八九年に起こった六・四天安門事件による一時的

な冷え込みを経過して、九二年の鄧小平「南巡講話」[4]以降に一層の開放路線を歩み始めるまでの段階は、現在の繁栄状況から見るとむしろ過渡期ともいえる時代であった。この期間、中国の「現実」をわれわれ外部者に伝える情報は、一部の先駆的なジャーナリストによるもの[5]以外、それほど多くは存在していない。

『上海紀聞』の巻末には約四〇ページにわたり中川道夫氏の文章が配置されているが、それによれば、中川氏は一九六九年、高校生の時に「学生友好訪中団」の一員としてはじめて上海を訪れている。文革中であり日中国交回復前ではあるが、このような政治的シンパシーを持つ少数の団体を受け入れることは、中国側から見て文革を宣伝するという意味で歓迎されたのであろう。中川氏を含む訪中団は「中国各地で紅衛兵や造反組織、革命委員会の熱烈な歓迎をうけた」[6]。上海滞在中は「いわゆる観光というものはほとんどなく、毎日ホテルで朝食を摂り終わるとすぐにバスで市内各所の文革で奪権に成功した造反組織や工場などの訪問に費やされ」[7]るという、極めて特殊な旅行を体験している。この文革期上海の体験から十年後、中川氏は再び上海の地を踏み、「四人組」のいなくなった上海を新鮮な目で再発見する。その時から写真家としての中川氏の上海観察が始まるのである。

＊　＊　＊

ここでこの写真集の中からいくつかの印象深い写真を取り上げ、そこに八〇年代上海のどのような空間が描写されているかを具体的に述べてみたい。但し『上海紀聞』の写真のページにはページ数が表記されていないので、次に示すページ数は筆者が仮に割り振ったページ数である。[8] カギ括弧内の文はそれぞれの写真に付けられた説明文である。なお、写真はすべてモノクロ写真である。

（1）八・九頁「黄浦江の船上から外灘（通称バンド）を見る。」

船上のデッキから外灘の古い建築群を遠望している。巨大な建築群は逆光でシルエットとなり写真の上部に写し出されている。水平線はほんの少し左に傾いており、波に揺られる船の不安定感を感じさせる。手前には、舷の手すりとともに数人の男の頭部がやはりシルエットとなって写り込んでいる。そのうちの一人は人民帽を被っている。外灘と男たちの間の水面は陽光を浴びてまぶしく光っている。

八〇年代はまだ浦東開発区が未開発であった。現在の上海を象徴する光景である浦東・陸家嘴（ルーチアズイ）地区の超巨大なビル群はこの写真の撮影時には全く存在していない。浦東地区の最初の高層建築であるテレビ塔「東方明珠」でさえ完成したのは一九九四年である。したがって黄浦江からの眺望は外灘の方向しかなく、反対側をふり返っても何もないのである。

（2）一四・一五頁「浮遊都市？人行天橋（横断歩道橋）の出現」

旧租界のメインロードである南京路と西蔵路の交差点にかかる円形の歩道橋。多くの歩行者がその上に見えるが、通行しているというよりはみな佇んで下の景色を眺めているといった風情である。歩道橋の欄干には「『中華人民共和国消防条例実施細則』を厳格に執行しよう！」とのスローガンが染め抜かれた横断幕が無造作に掛けられている。下の道路には数多くの自転車、バスが交差点を横切っている。

外灘から南京路を西にしばらく歩くと出会うのがこの大きな交差点で、角には大きなデパートが店を構えている。説明文に「出現」とあるとおり、写真の頃はまだこの歩道橋が完成したばかりであった。モダンな円形の歩道橋をもの珍しげに見物する人々がざわざわと集まり、逆に道を急ぐ人は歩道橋を使わずにさっさと道路を横切っていた。現在、この付近に地下鉄の駅ができたこともあって地下道が掘られており、歩道橋はすでに存在していない。

（3）二三・二四頁「北京と上海を結ぶ鉄道・京滬線の大踏切。」

鉄道の踏切を写した横長のパノラマ写真。踏切を横断するおびただしい自転車で線路がほとんど見えない。自転車の群れの中に荷台をつけた三輪車が何台も混ざっており、どれも大きな荷物を運んでいる。手前の三輪車はソファのようなものをいくつも荷台に積み上げている。後ろからもう一人、自転車を押して歩きながら落ちないようにその荷物を左手で支えている人がいる。右手は自分の自転車を支えている。向こう側には紙の束のようなものを満載した三輪車が見える。荷物の上端は人々の頭上よりはるかに高い。さらに別の道路が高架になって線路をまたいでいるが、その手すりから下の様子を眺めている人物が十人ほど小さく写っている。線路沿いにみすぼらしい家

屋が並んでいる様子も窺える。

どこの踏切なのかはわからないが、北京方面を発した列車が京滬線終点の上海駅[9]に近づき、市街地に入った頃に通過するどこかの踏切だろう。モータリゼーションの波が押し寄せて自動車が急速に増加する以前、上海の道はどこも自転車であふれていた。踏切で汽車が通過し遮断機が上がると、自転車が先を争って踏切になだれ込む光景が見られた。荷物を運搬するのも、トラックより人力の三輪車が主役であった頃だ。現在は市街地の踏切はほとんど立体化され、もうこのような光景は見られないだろうと想像される。

（4）三七頁「〝上海構成主義〟とでも言ったらどうだろうか。郵便箱、牛乳箱が蝟集する雑居アパートの入口。円明園路。」

説明の通り、アパートの入り口の扉を写した一枚。老朽化した木製の扉であるが、菱形の窓ガラスやアールデコ風のちょっとした飾りに上海を感じさせる。面白いのは、部屋番号が書かれた、形も大きさも様々な木箱が十一個、一箇所にかたまって取り付けてある。部屋番号のほかに「信箱」「牛奶箱」の文字が見える。よく見ると郵便箱のほうには錠前が付いていて、勝手に開けられないようになっている。なぜか「５０１室」のものだけが横倒しになって取り付けられている。

上海の一般庶民の住宅事情の悪さは有名であった。「里弄（リーロン）」あるいは「弄堂（ロンタン）」と呼ばれる旧時代からの長屋風住宅がいたるところに存在し、多くの場合、かつて一世帯が住んでいた住居を新中国以降はさらに区切って複数の世帯が暮らすという状況であった。この写真のように古い家屋の入口に居住者の郵便受けがずらずらと並ぶのは普通

に見られる光景であった。現在、市街地には高層マンションが立ち並び、このような旧式の「雑居アパート」は目に見えて減少している。

（5）五八頁「食器棚の下にレンタンが積まれている厨房の一隅。」・五九頁「キッチンの反乱？階段の踊場に設けられた台所。」

この二枚は住宅内部を写したもの。実に懐かしい光景だ。塗装のはがれた古い食器棚に、陶器やホーローの食器類、調味料のビンなどが収められている。食べ残しのおかずが入ったままの碗も見える。食器棚の下の空間には、練炭がぎっしりと積んである。五九頁のほうは、階段の上から踊り場を見下ろしたショットであるが、比較的大きな家屋のようで、古くはあるが階段の手すりの装飾は見事なものだ。広い踊り場の正面に窓があり、窓の下には合計八口の簡易コンロが並んでいる。コンロの下部にはガスメーターのような箱がある。側面の壁には大きな籐籠のようなものが並んでいる。

電気、水道、ガスなどのインフラは租界時代の上海にすでに整備されていた。その後五〇年代以降の社会主義建設の時代を経てもいるので、上海市内の住宅では基本的にガスを使用することができる。ただ、中国北方の都市のような集合住宅全体を循環するボイラー設備がないので、厳冬期には室内は相当冷え込む。五八頁の写真に見える煉炭は調理用ではなくて暖を取るためのものかもしれない。

また、（4）で見たように古い住宅を共用することが多かったため、五九頁のように共用の炊事場が踊り場などに設置されることもあった。床が板張りであるので火災の危険度が極めて高いが、ほかに場所がないのでやむなく

こういった空間を使用するのである。（2）の写真に写っている「消防条例を厳格に実施しよう」のスローガンが皮肉に見える。そもそも上海人は、ほかの地方の人と比べてプライバシー意識が高いと言われるが、こうして八〇年代まで続いていた異常に過密な住宅状況をどのように乗り越えてきたのか、そのあたりにも上海人独自の知恵がありそうな気がする。

（6）八八頁「外灘（バンド）に沿った緑地帯の一角、上海を象徴する場所として記念写真のメッカになっている。」

遠景に和平飯店と中国銀行ビル、近景に外灘の噴水、これらを背景にお洒落な青年が一人でポーズをとっている。青年は髪を七三に分けて大きなサングラスを掛け、背広姿でノーネクタイにカーディガン、シャツの大きな襟は外に飛び出している。

この青年のスタイルは、しかし当時の中国では最先端を行くファッションであった。記念写真を撮っているこの噴水も八〇年代に造られた最新のもので、背景に大上海を象徴する建物とくれば絶好の撮影ポイントである。現在はこのあたりの遊歩道がさらに立派に整備され、外国人を含めた観光客が毎日ぞくぞくと集まってくる。しかし人々が記念写真の背景にするのは十中八九これと反対側、東方明珠や金茂ビルが立ち並ぶ浦東の景観である。

（7）九一頁「大谷探検隊で知られる大谷光瑞は汎アジア主義者だった。大陸への足がかりとした旧西本願寺上海別院。乍浦路。」

共同租界にある旧西本願寺上海別院の建物は、非常に特徴的な建築物である。旧上海に注目する日本人にはわりとよく知られている。正面玄関のひさしの上の部分には、白い石造りの半円形の大きなアーチがあるのが印象的である。唐草模様の装飾が施され、大陸様式というべきだろうか、確かに日本の仏教寺院らしからぬ「汎アジア」的雰囲気を醸し出している。

しかしこの写真を見て驚くのは、玄関のところに様々なガラクタが積まれていて、建物入り口が完全にふさがれていることである。その前には洗濯物を干した物干し竿が置かれ、自転車が一台停まっている。日本人にとっては由緒ある寺院建築物が上海庶民のガラクタ置き場と化しているのである。

一時期、この旧西本願寺の建物がカラオケ・ダンスホールとして使われているという情報があった。それはおそらくこの写真撮影時よりも後のことだろう。現在は「上海市優秀歴史建築」に指定されており、とりあえずは解体を免れているもよう。

（8）一〇一・一〇二頁「上海のスカイラインが変貌する。華東電業管理局跡地に建築中のビル。」

写真の中央に建築中の高層ビルディングが一棟、天を衝いている。しかし周囲には高層ビルの姿は全くなく、背の低い古びたビル、または「弄堂」住宅の屋根が延々と続いている。遠くの景色はスモッグに霞んでいる。

このビルは南京東路に面した場所にある電気局の建物であり、八〇年代後半に完成した。そのころ南京路の周辺

に新しい建築物はまだほとんど造られておらず、この電気ビルが唯一の新型高層ビルとして人々の目を引きつけていた。このあと九〇年代以降に続々と高層ビルが建ち始めるので、説明の通り「スカイラインを変貌させる」最初の建築物となった。現在は周囲に立ち並んださらに高く近代的な建築物によって埋もれてしまい、特に目立ちもしないビルとなっている。

（9）一一二・一一三頁「外灘の夏の風物詩。」

おそらく黄浦江の船上から外灘側の川岸を撮ったものであろう、暗闇の中にフラッシュの光を受けてたくさんの人の上半身が浮かび上がっている。みな、コンクリートの壁に寄りかかってこちらを向いている。半袖の開襟シャツやTシャツなど、ほとんどの人が白いものを着ている。

八〇年代の夏の夜、外灘の黄浦江沿いのプロムナードは夕涼みをする地元の人たち、あるいは愛を語る恋人たちでいっぱいであった。胸元ほどの高さの古いコンクリート製の手すりがあり、皆これに寄りかかって濁った川面を見つめたり、対岸にまばらにある広告塔のネオンや、行きかう大型船を見たりしていた。照明は少なく、隣の人の顔さえよく見えないほどの暗がりであったが、人はたくさんいた。上海の夏は蒸し暑く、まだ屋内にクーラーもほとんどなかった頃であり、夕涼みに外を歩く人は意外に多かった。恋人たちにとっても、ほかに気の利いた遊び場など皆無だったこの頃には、夜の公園や外灘の遊歩道が格好のデートスポットだったのだ。

このプロムナードはその後改修されて様子は一変している。現在はまばゆい光を放つ対岸の巨大建築をバックに写真を撮る観光客の姿があちこちに見られ、反対側にはライトアップされた外灘の古い建築物が勇壮な姿をさらし

ている。夕涼みの散歩客は観光客の波に押されてもうあまり見られない。

(10) 一四四・一四五頁「敷石を剥ぐと水の音がきこえる。エドワード七世路（現・延安東路）は以前、洋涇浜（ヤンチンバン）と呼ばれるクリークだった。」

広い道路の交差点の写真。道路の一部が工事中のようである。四角い敷石が剥がされ、乱雑にそこらじゅうに散らばっている。しかし工事をしている人の姿はなく、歩行者は土のむき出しになった上を歩いている。スイカを片手に提げて足元を見ながら歩いている夏服の女性は、一昔前のスタイルである。道の向こうには古い建物があり、「棉布商店」等の汚れた看板がかかっているのが見える。その前には自転車が一団となって信号が変わるのを待っている。

説明文によると、写真家の興味はこの道路が昔は「洋涇浜」と呼ばれる、英租界と仏租界を隔てるクリーク[10]であったことにあるようだ。「水の音がきこえる」との表現は、今はないかつての水脈を追憶したものに他ならない。しかし現在この写真を見ると、むしろこの、道路を掘り返しただけでやめてしまったかのようないいかげんな道路工事の様子に、八〇年代らしさを感じてしまう。現在ならばきちんと囲いをして歩行者が入れないようにして、それなりのスピードで工事をおこなうに違いない。しかしこの頃はまだ、このような適当なやり方でいつ終わるともしれない工事があちこちでおこなわれていたものだ。歩行者の通路も確保されていないため、しばしば工事現場の真ん中を危険を覚悟で歩かなければならない場面に遭遇した。

（11）一四九頁「街の喧噪から逃れて、アスター・ハウス（現・浦江飯店）は旅行者用ドミトリーとしても使用されている。」

浦江飯店内部の写真。木張りの床に簡易ベッドが二十二床並んでおり、その上には質素な蒲団が敷かれたり、畳んで置かれたりしている。手前のほうに宿泊者が三人、寝転んだりベッドに座ったりしているのが写っている。上の階は回廊になっていて、吹き抜けになった天井の採光窓から明かりが差し込んでいる。天井や梁のあたりのデザインはとても美しく、床の野戦病院のような様子と好対照をなしている。

浦江飯店は外白渡橋（ガーデン・ブリッジ）脇に建つ上海租界で最も古いホテルである。イギリス人リチャード・アスターによって「アスター・ホテル&レストラン」が創業するのが一八四六年、「アスター・ハウス（当時の中国名・礼査飯店）」として現在の建物が竣工するのは一九一二年である。一九五九年に英国資本から人民政府に接収されて浦江飯店と改名する。八〇年代すでに老朽化していたこのホテルが一躍脚光を浴びたのは、外国人旅行者に安い料金で宿を提供したからであった。前述したように欧米人は『Lonely Planet』を、日本人は『地球の歩き方』を手にしてバックパッカーたちが中国を歩き回った時代、彼らが上海に着いてまず訪ねるのが浦江飯店であった。ここには「ドミトリー」と呼ばれる大部屋があり、ベッド単位で宿泊料を支払う制度になっていた。その当時こういった形式のホテルが各都市にだいたい一つはあり、バックパッカーが集まって情報交換ができる場所として知られていた。例えば北京なら光華飯店という安ホテルにやはりドミトリーがあってバックパッカーの集合地になっていた。

しかしこの写真を見ると、ベッドが置かれている場所は部屋ではない。むしろ廊下と言ってもよい空間である。

ベッドは壁際に並んでいるが、その壁にはドアがいくつかあって、ドアの内部が本当の客室なのだ。察するにドアの内部にもベッドが詰め込んであるのだろう。

現在、浦江飯店は改修され、昔の面影を残したオールドホテルとして営業を再開している。ベッドが並んでいた吹き抜けの床部分には、アスター・ハウスの歴史資料が展示され、ホテル内の小さな博物館といった趣きを作り出している。バックパッカー御用達の安宿はというと、「モーテル168」[11]など最近上海に次々とできている安価なビジネスホテルにその役割を譲っている。

（12）一五六頁「昼寝をする人。北蘇州路。」

綿入れを着こんだ男が、日差しの中、何かに寄りかかって立ったまま昼寝をしている。寄りかかっているものは、よく見れば租界時代の古い消火栓である。北蘇州路は蘇州河の北岸に沿った道だが、外灘に近いほうは共同租界になる。この消火栓が残っているところから見て、おそらくここは旧租界内だろう。男の背後には旧時代のビル、外壁のまわりにさらに鉄製の壁があるが、そこには子供の字で「小学生」と落書きがしてある。

この写真集に収められている写真には、建築物や街の風景だけを写したものもあれば、人物が主役である写真もある。人物を写したものには、上海の人々に対する中川氏の温かい視線が感じられるものが多い。ふと立ち止まって昼寝を妨害することなく静かにシャッターを切ったという風情の、人物との距離感を残した写真である。しかも、ビルと消火栓の存在が旧上海からの時間の流れを、落書きと昼寝男の姿態が現代上海人の日常を想起させ、多様なイメージによって語りかける写真である。

＊　＊　＊

中川氏のこれらの写真から、同時期の上海を留学生として過ごした私は言いようのない懐かしさを感じるのであるが、そこにはそれが単に無くなってしまった風景だからという理由だけでは説明できない複雑なものがある。その複雑な感覚を呼び起こす理由をいささか考えてみたいと思う。

一九七六年の四人組逮捕まで文化大革命のさなかにあった上海は、八〇年代初頭にはまだまだ社会主義的な秩序が支配する都市であった。大学の入口には制服の門衛が出入りする人間に厳しい目を光らせており、中国人学生や教師たちとは明らかに違った服装をしている日本人留学生は誰何される。私たち留学生は、大学のバッヂをつけて留学生であることをアピールしなければならなかった。それは街中の公的機関や企業でも同じことで、見知らぬ顔の人物が勝手に入ろうとすると門番は必ず「ウェイ！ウェイ！」と呼びとめた。一九八三年に中国政府は「精神汚染批判キャンペーン」を展開し、資本主義国家からもたらされる文化、例えばテレサ・テンのミュージックテープなどが批判の対象となって街角から消えた。鄧小平時代となって開放路線を歩み始めた中国であったが、まだ警戒心も強かったのである。この頃に中国に留学していた外国人留学生もまた警戒される傾向にあり、大学側は思想の優秀な中国人学生を選んで「陪住生」として留学生と同部屋に住まわせた。「陪住生」は表向きは留学生と一緒に暮らしてアドバイザーをつとめるのだが、一方で留学生の行動を密かに監視し大学に報告する任務も担っていた。八〇年代後半になって留学生が増加すると、この制度もしだいになくなっていった。

社会主義国家特有のこういった厳格な部分があった反面、市民社会としては未成熟な面も大いにあった。規則にのっとって物事を行うという観念が著しく不足していて、担当者のさじ加減ひとつでどうにでもなる人治社会であった。劇場のチケットを買うにしても、窓口の売り子に親しくなれば良い席のチケットを出してくれる。売り子は知り合いや親せきのために良い席を確保していて最初のうちはそれを売らないのである。すべてがこのような調子であって、中国で何か行動しようと思えばまず人を頼らなければならないと言われていた。小さな賄賂を贈る習慣も横行していた。もちろんこういった中国特有の生活の知恵は現在でも残っているのだが、八〇年代に比べて現在は社会のあらゆる場面で明確なルール作りがなされ、ある程度公平に運用されるようになってきている。

あるいは（10）の写真に見られるように、住民サービスという視点が行政に欠けているために、インフラ整備は場当たり的で無計画、資本主義世界から来た者からすると苛立たしさが募ることが実に多かった。

このような社会主義中国の特徴は五〇年代以降の蓄積の中でできあがってきたものなので、内部者の観点からすれば八〇年代の特徴と言うには当たらない。だが、まさにコロンブスが大陸を発見したごとく、開放を始めた上海に外国人が真っ先に「発見」したものは、社会主義中国の濃厚な色彩だったのである。開放当初に中国を訪れたジャーナリストや旅行者たちのどの中国見聞記を読んでも、このことが深く印象付けられていることがわかる。

ところが、例えば人のいない真夜中の上海租界を歩いてみると、これが全く違った都市のような感覚にとらわれる。面倒で苛立たしく感じることはすべて人事であり、それを一旦心のスクリーンから消し去ってしまえば、眼前に広がるものは租界時代の国際都市上海の姿そのままなのである。人を消した後の建物や道路は、映画や小説から私たちが想像するオールド上海のイメージをそのまま喚起してくれるに十分なほど、何も変わっていないのであっ

た。この激しい落差、あるいは違和感は、八〇年代上海特有のものだったと言わざるを得ない。

『上海紀聞』の写真から、中川氏も同様の違和感を感じていたことはひしひしと伝わってくる。これは文革中に中国を訪問し、八〇年代以降にさらに上海訪問を繰り返した体験を持つ中川氏だからこそ捉えられた時代相だろう。

同種の写真集で比較的時期が近いものに『齋藤康一写真集　上海'92-'93』[12]がある。この写真集に収められた写真の中には『上海紀聞』の写真と同じ風景を写したものもいくつかあり、目の付けどころも近いものがあるが、大きく違う点はこちらのほうは人物を中心に撮影していることである。各作品の主題は同時代の上海を生きる人々であり、にこやかに街角で社交ダンスを踊る熟年夫婦や、日なたでくつろぐ老人など、豊かな表情を持った上海市民が次々と登場する。巻末の解説文によれば齋藤氏もかなり早い時期から中国訪問を繰り返しているようで、両写真家には共通点が多いと見えるが、作品の視点はいささか方向を異にしている。

写真集ではないが、八八年の出版になる藤原恵洋『上海－疾走する近代都市』[13]にも同時代の上海を写した写真が多く収められている。ただ、著者の藤原恵洋氏が建築史研究者ということもあって、興味の中心は上海の建築にある。収録されている写真もほとんどが建築物を撮影したものである。そこに住まう人間に関する記載は、わずかに最終章で日本式家屋に居住する家族を訪ねた体験が語られるだけである。

人をクローズアップする齋藤写真集、建築に注目する藤原『上海』。この二つの仕事のそれぞれの視点をもし両極に置くならば、中川『上海紀聞』はその両極の間を不安定に揺らぎ続けているのである。この宙吊りの不安感、言い換えれば違和感こそが、私の共鳴を呼び起こした要素にほかならない。

＊　＊　＊

都市にまつわる記憶は、本来連続性を持つものであろう。わが街の百年前の姿を見たことがなくとも、祖父母の世代の語り、過去を記録した文章、過去を写した写真、その他さまざまな情報から我々は過去のわが街への想像を補うことができる。またそういった断片的情報から我々自身がその場所を通じて過去と繋がっているという感覚を持つことによって、都市の記憶は連続性が確保される。

しかし他者の視線によって発見された八〇年代上海は、住民の側から見れば、記憶の連続性が閉ざされた状態にあった。租界時代の上海は単に「抜け殻」としてそこにあっただけで、住民が都市の外貌によって過去を追憶するという回路が遮断されていたのである。

こういった事態を生んだ根源的要因は言うまでもなく、人民共和国の歴史観である。一九四九年以前の上海にまつわる様々な事象をすべてひっくるめて「旧時代」と片付けた歴史観によって、上海住民は上海という都市への想像を放棄するよう促されたのである。このことはまず確認しておかねばならない。

しかし九〇年代以降に上海が再び国際都市として成長する過程において、都市の記憶は戦略的に修復されることとなる。それは外灘の再整備や、オールド上海を前面に打ち出した観光地「新天地」[14]の様子、あるいは二〇一〇年に開催される上海万博のプロモーション[15]を見ても明らかなことだろう。国際的観光都市としてアピールするためには、必然的に過去のイメージが必要とされたのである。もし中国の開放政策が軌道に乗っていなければ、上海とい

う都市の記憶の断絶は一層決定的なものとなり、抜け殻は抜け殻のまま朽ち果てていくことになったであろう。皮肉なことにも、他者の視線によって上海は都市の記憶を繋ぎ合わせる結果となったのである。

〔注〕

（1）一九八八年一〇月　美術出版社

（2）一九七三年よりLonely Planet社から出版されている個人旅行者向けガイドブック

（3）一九七九年よりダイヤモンド社から出版されている個人旅行者向け日本語ガイドブック

（4）一九九二年一月から二月にかけて鄧小平が武漢、広州、深圳、珠海、上海などを視察した際に発表した談話。保守派を批判し、市場経済による一層の発展を強く主張した。

（5）たとえば船橋洋一『内部』（一九八三年　朝日新聞社）、西倉一喜『中国グラスルーツ』（一九八三年　めこん）などがある。

（6）『上海紀聞』一七三頁

（7）『上海紀聞』一七九頁

（8）『上海紀聞』は写真のページと文章のページから構成されているが、文章のページには一七一ページからページ数が明記されている。しかしこのページ数を元に写真の部分にページ数を割り振ろうとすると、一〇ページ分足りなくなる。おそらく出版時にページ数を付け間違えたものだろう。そこで巻頭の扉ページを基準にし、一ページから一六〇ページまで写真の部分に割り振った。

（9）当時の上海駅で、通称「北站（ペイジャン）」と呼ばれていた。現在の上海駅とは別の場所である。

（10）「洋涇浜」は一九一五年に英仏両租界によって埋め立てられ、消滅した。

（11）中国語名「莫泰１６８」。中国全土に展開する格安ホテルチェーン。上海に八〇軒以上ある。

（12）一九九三年一一月　日本カメラ社

（13）一九八八年一月　講談社現代新書

（14）旧仏租界の一角を再開発し、二〇〇〇年にオープンした総合施設。バー、レストラン、ショッピングセンターなどの店舗

が集まっているが、全体はレンガ造りの石庫門住宅をモチーフとし、一部は昔の住宅をそのまま保存している。香港の瑞安集団が開発に携わった。

(15)　上海万博開幕一年前を記念し作られた曲『城市』のプロモーションビデオ。「城市」（＝都市）は上海万博のテーマでもある。ジャッキー・チェンが歌い、ピアニストの朗朗が演奏する。映像のイメージは近代的な上海の風景と弄堂の庶民的風景がうまく組み合わされており、「都市」理解の変化を感じさせる。一昔前の中国なら、都市は農村の対立概念として先進的、消費的、現代的な存在でしかなかった。

〔追記〕

本稿を脱稿した後、中川道夫氏の新しい写真集『上海双世紀一九七九－二〇〇九』（岩波書店、二〇一〇年二月二四日発売予定）が出版される予定であることを知った。本稿で取り上げた『上海紀聞』所収の写真を含め、三〇年間の長いスパンで上海の変化を映し出す写真集であろうと予想される。わずかの時間差によって本稿でこの内容まで言及することができなかったことは至極残念である。

二〇一〇年一月二二日記